ARISA SAKAI

酒井有彩のこれからのこと そしてこれまでのこと

シャネル・ピグマリオンデイズアーティスト。(財)地域創造公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト
また、Music Dialogue アーティストでもある ピアニスト酒井有彩さんにインタビューさせていただきました。

音の響き、それが聞き手にあたえる印象をとても大切にされている酒井さん、美しい音とはどういうものかというビジョンが幼少期からの想像力、そして9年間の海外での勉強によって得た経験と知識でご自身の中にはっきりと描けているのだなと感じました。そして最適な音色を瞬時に選び出し、水のような柔軟性をもつ方という印象を受けました。楽しく読んでいただけたら幸いです。 絵と文 Sumire Akasaka

酒井有彩さんにこれからについて伺ったところ、この答えをいただきました。
「アンサンブルピアニストとして信頼されるような奏者でありたい。」 現在、そしてこれからも大切にしている酒井さんの3つのことをお話しいただきました。

ソリスト 1つめ

ピアノはソロのレパートリーがすごく多い、一生かかっても全では弾ききれないほどです。ソロで弾いていても楽譜という作曲家が残したメッセージがあり、それを紐解き演奏を通してお客さまへ伝える。

1人で弾いていても、作曲家と奏者、メロディーとハーモニー フレーズとフレーズ お客さまと私 など対話があふれています。

相互作用

室内楽 2つめ

室内楽を集中的に勉強すると楽譜の見方が変わります。例えば、ベートーヴェンのピアノソナタはピアノソロのための作品ですが、弦楽四重奏や木管楽器、オーケストラ…と様々な楽器をイメージさせます。室内楽を勉強することで、より立体的に、そしてより深く楽譜から読み取れるように。

でも実は…

日本でも海外でも室内楽に特化して勉強する機会はなかなかありません。

20代はソロに意識が向いていて、20代後半から室内楽のレパートリーを集中して増やすようにし、その変化のきっかけは?

Music Dialogue 芸術監督 大山平一郎先生との出会いが大きく影響したんだとか!!

演奏を聴いて下さっていたというのは後から知りました!

この時の大山先生の様子を Music Dialogue 事務局長 伊藤美歩さんがおしえてくれました。

大山さん、何だか集中力がなくなっていってる…?

上のそら

2015年 シャネル・ピグマリオンデイズアーティストのソロリサイタル公演前日、会場で1人、リハーサルをしていた酒井さん。その休憩中に大山先生に声をかけてもらったのがはじまりでした。

大山先生の第一印象

オーラのある方だなあ

話のテンポ

室内楽を集中して勉強したんだよ。

おそらくこれがきっかけ。

今の曲のフレーズは…

その日、打ち合わせの為ミャネルに来ていたオニス

翌年 2016 のシャネル室内楽シリーズにて初共演

初共演は衝撃的で今でも覚えています。リハーサルで"音楽を作りあげる"過程の密度がすごい! 楽譜に対するアプローチの深さがすさまじい! 本当の意味で楽譜をどう読むのかを1から教えていただきました。

酒井さんの音にピンときたのでしょうか!

そして、そのうち立ちあがってとことことどこかへ行ってしまったそう。

アウトリーチ 3つめ

アーティストがコンサート会場ではなく小学校等へ出向いて音楽を通してコミュニケーションをとるという活動

酒井さんのアウトリーチのテーマは

「子どもたちの想像力にはたらきかける」

音楽をきいて時間や季節を想像してもらいウォーミングアップも行いながら最終的には子どもたちにクラシックをきいて物語を考えてもらったりしています。

1から酒井さんご自身で組み立てているんです!!

コンサートホールでの演奏会は社会とのつながりがコンサートホールに限定されてしまうので、今まで音楽と触れ合う機会がなかった方にも、やっぱり芸術の素晴らしさを感じてほしい! アウトリーチ活動はずっとつづけていきたいです。

ポーランド国立放送響、リベイランプレート響、東京フィル、東響、新日本フィルをはじめオーケストラとも数多く共演してきた酒井有彩さん。室内楽を集中的に勉強したことでオーケストラと共演する際も「ピアノ」と「オーケストラ」ではなく大きな対話をするように演奏するという意識になったそう。またアウトリーチ活動を通してクラシックと今まで触れ合う機会がなかった方にどうやったら音楽で対話することが出来るか、その入口を如何に入りやすいものにするかということをより考えるようになったと言います。
酒井さんからお話を伺っていて丁寧で柔らかな方という印象と共に、ご自身の音と真摯に向き合い、学び演奏を通して知識と経験を積むことに貪欲なガッツある面もあるところがとても素敵だなと思いました。
留学時代に鍛えられた耳によって明確な音のビジョンを持ちながら演奏されている酒井さんのピアノはクリアな粒が溢れてくるようです。曲の感情や色合いを引き立たせるような魅力的な演奏は、ひとつひとつの経験をきちんと自分の中で消化してそれを直ぐに引き出せるよう、常に舞台に立ち続けてきたからこそ。これからの酒井さんの活躍も見逃せません!!

これまでのこと

現在に至るまでにどんな音楽の道を歩いてこられたのかうかがいました。

ピアノをはじめたきっかけは?
お母様のもので生まれたときからグランドピアノがご自宅にあったそう。ピアノは身近な存在で、遊ぶようにピアノとたわむれていました。

そとなあそび

調律師が家に来て調整をしている約2時間の間、2才の有彩さんはずっとピアノの下で音をきいていたそう。

この姿を見ていたお母様はピアノとちゃんと習わせてみようかなと思った。

そして4才から習いはじめました。

小学生のころは作曲が大好き!
その日の出来事を文字ではなく音で奏でる
いわば「音日記」のような感じ。

構成とかはないけれど浮かんできたものを音にしていました。色や、その日あった事とか、自由にイメージしてピアノを弾くのが好きでした。

大阪のザ・シンフォニーホール!! 2000人の観客の前で!!

6才の時、ヤマハで毎年行われる作曲イベントでピアノじゃない!!

はじめて舞台に立ちました。

初舞台は、歌の曲

そしてこの歌はヤマハの教材のCDになりました。すごい〜!!

波のような拍手に感動!
舞台ってこんなに楽しいんだ!と感じました。

楽しい〜!

高学年になり教則本ではない偉大な作曲家たちの作品に触れるようになり、そこで、もっといろいろな作品を演奏したい!という思いが増し、演奏力を磨くという方に意識が向いていきました。作曲からピアノの道へとフォーカスしていったのですね。

中学2年生で浜松国際ピアノアカデミーのオーディションに受かり参加。

酒井さんが参加したマスタークラスでは、世界的なピアニストの育成を目的とし、中村紘子氏など世界的アーティストを育ててきた4人の教授から2週間の集中講座を受けました。
↳ それはそれは濃い、濃すぎる2週間だったそう。

こんなに上手なんだ…

日本国内にかぎらず各国の同世代のアーティストの演奏をきき「この道を極めたい」と思うように。

ピアニストになりたい!!

中学2年生、3年生と参加し、その中でプロミシング・アーティスト賞を受賞

中学3年生の時出会ったのがジャック・ルヴィエ先生でした。

先生の指導は生徒の成長に合わせ、少しずつ要求するレベルを変化させて作品の理想としているものを教えて下さいます。
ラヴェルの弟子ペルルミュテールの弟子、つまりラヴェルの孫弟子にあたり、「ラヴェルがこう言っていた」というのをレッスンで伝授して下さり、となりで再現してくれる。言葉では言い表せないエスプリ。

こうもあり!

再び会ったのは

高校2年生の時に日本で受けたコンクールで ジャック・ルヴィエ先生が審査員として来ていたため、「先生の下で勉強したいです。」と伝えます。

これはチャンスだ!と思い

先生はとにかく音がきれい。音の響きのあやつり方、調和の仕方が美しい

そうして四天王寺高等学校を卒業後、18歳でフランス・パリへ! 2年間パリで過ごします。

その後、ドイツ・ベルリンへ! 7年間過ごしました。

パリ

新しい生活がはじまる! 楽しみ!!

18歳 何もいらない

ルヴィエ先生は両方の国で教えられていました。

ベルリン

20歳ちょっと大人になったみたいです。

ベルリンの冬は真っ暗 太陽が顔を出すのは1日1時間ほど。

そのせいもあったのか初めてホームシックになりました。

春がこんなにも待ち遠しいものなのかと思いました。

小さな春見つけ。

ぱっ

2つの国で勉強することで様々なインスピレーションを得ることができた。

国はとなりだけど、街の景観、空気の香り、空間の響きや人のキャラクターもちがう

舞台の緊張感の中でしか得られない経験があると思っていて、舞台に立ちつづけているアーティストはアイディアのひき出しもバリエーションもどんどん広がって成長し続けられると思って

ドイツの作曲家の作品には春が来た喜びを表現したものも多く、ドイツで暮らしはじめて春の待ち遠しさが実感できました。

出来るだけ舞台に立って自分がステップアップする環境で活動したい想いがありました。

ちょうど2015年シャネル・ピグマリオン・デイズアーティストとしての活動がはじまったタイミングでもあり日本での演奏機会も増えるのかな?というのもあって、少しでも舞台に多く立てるチャンスがある場所へと行こうと思いました。

自分のスキルUPにだけ集中できた大切な時間でした。

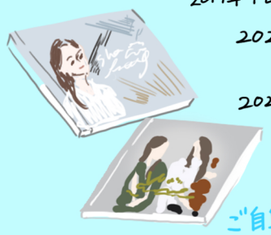
9年間の海外生活を経て、日本へ帰国

帰国の翌年、現在酒井さん自身が大切にされている「アウトリーチ」のきっかけとなる(財)地域創造公共ホール音楽活性化事業のオーディションを受け、登録アーティストとなります。マネジメントも決まり日本へ完全帰国

オーディションの審査をされていた指揮者の飯森範親さんにチャンスといただき2019年デビュー・アルバム「ラヴェル:ピアノ協奏曲」をリリース

2023年には19世紀のドイツ・ライプツィヒをテーマにした、2ndアルバム「憧憬-Sehnsucht nach Leipzig」をリリース

2024年は、デュオアルバム「歌う旅路〜Voyage lyrique a deux」をヴァイオリニストの間防亮介さんと共にリリースしました。



20代ではとにかくコンクール思い出深くて今よりも断然若くて好奇心旺盛で"伸び代"ができたんです。

ベルリン芸術大学を最優秀で卒業
その後、同学の国家演奏家コースを卒業し、ドイツ国家演奏家資格を取得しました。

フランスとドイツは日常的に一流の演奏家が毎晩のようにコンサートをしていて、一流の生きた音楽をきくことができました。これが何よりも刺激に。

ベルリンフィルハーモニーの立ち見席なら1000円くらいで行けちゃう!! 日本だと5万円くらいしますよね…

ベルリンの厳しい冬も、音楽で悩んでいるのに、その音楽をきくことで救われたり。ベルリンフィルのブラームスのシンフォニーをきいたときには、「音楽はこんなにも人の心を感動させるものなんだ」と音楽に救われる経験を自分の肌で感じ音楽に対する憧れも強まりました。

疲れや悩みがカラダからぬけていくような素晴らしさだった。

ご自身のコンサートもアルバム制作同様、物語を紡ぐようにテーマ性をもってプログラムをつくりたいと思っているといいます。
「クラシックがはじめてという方にも自然と入っていただけるようなものにしたい。」と考えるようになったのは、アウトリーチの経験が活きてきているのでしょう。音楽を通してこれから酒井さんが広げてゆくコミュニケーションが楽しみです。

インタビュー:2024年12月末日